



愛隣幼稚園.....

園だより

.....17. 3月号

大切な事は見えないから

3月になります。カンガルー組には最後のひと跳ね、あいりん山の頂上からはどんな景色が見えるのでしょうか。見える景色はそれぞれでも、どの子にも登りきった満足感を一緒に歩いてきた仲間たちと味わい、分かち合ってほしいと思っています。

園庭で遊んでいる子どもたちの写真を撮っていた時のこと、すべり台の滑り面にじょうろで水を流しているT君に出会いました。「あ、あんなことして、濡れたら滑れなくなるのに・・・。」声に出してしまいそうでしたが、T君の表情からは何か違うものを感じ言葉を替えました。「どうしたの？下まで流れるところ見たかった？」T君の表情はそんなことを聞かれること自体ピンときていなくて、“そのとおりだけど、なんでそんなこと聞くの？”という表情。「全部下まで流れなかったね。」(滑り面の隙間からかなりの水はそのまま落下していたので)「うん。(そうだよ、思った通りじゃなくてちょっとがっかりさ。)」「すべり台濡れちゃったね。拭いとく？手伝うよ。」するとT君はさっと降りてきて、雑巾を取りに行きました。【じょうろで水を流してすべり台を濡らした】目に見える事実は褒められることではないのですが、目には見えなかったことの方が大切でした。軽率な発言をするところでした。雨樋を使って水を流すのではなく、すべり台というスケールで流れる水をT君は見たかったのですが、その思いは目には見えないのです。子どもたちと生活する私たちは同様のことでしばしば間違いを犯します。「本当に大切なことは目には見えない。」と子どもたちに気付かせてもらいます。

これも目に見えないこと。「主の祈り」の話をしている礼拝で、“我らの日用の糧を今日も与えたまえ”というお祈りをとりあげ、何日もご飯を食べることができずに死んでいく子どもたちがたくさんいる、という話をしました。愛隣の子どもたちにはリアリティに欠ける話です。食べられないということはどういうことか、食べられないとどうなるのか、なぜ、ご飯がないのか、私たちにできることは何か、子どもたちに話しました。知らない国の名前も知らない子どもたちのことですが知っていてほしい、忘れないでほしいと願って話をしました。子どもたちは見えないことを一生懸命想像して、考えていました。共に生きる仲間として知らなければならぬ現実、目に見えていることだけではないということ、子どもたちには知っていてほしいのです。

そして先日、私は南相馬に行く機会を得ました。震災後、初めての福島でした。私には何もできませんが、せめて自分の目で見て福島にある現実(放射線のこと)を考えたいと思っていました。昨年の夏に避難解除になった町を少しだけ歩きました。人気のない町には音がなく、聞けばここには子どもは一人もいないとのこと。「子どもがいない町」を私はおそらく生まれて初めて歩きました。ここはもう安全と言われても、子どもたちが安心して暮らせる町ではないという親たちの想いが伝わってきました。実際、南相馬の子どもたちは震災から長い間、土も草も木も水も小さな虫たちも自由に触ることはできず、6年経過した今も、町の周囲の野山、川、草原は除染されていないので子どもたちが自由に駆け回ることができる場所ではありません。町の形はそのままここにあるのに、放射線という見えないものの恐怖は消えず、町は元の活気を取り戻せないままでした。震災から6年、千葉に住む私たちは何事もなかったかのような毎日を送っています。でも、福島はそうではない。南相馬の現実私たちには見えず、知ろうとしなければ知ることもなく、放射線も目に見えませんが、しかし、私たち大人が想像力を駆使して考えなければならない、「大切なこと」がそこにはあるように思います。

SNSの普及で私たちはあらゆる情報を得ることができるようになりました。世界は手中にあります。しかし、「大切なこと」は知ろうとしなければ見えてはこなくて、たとえ見えたとしても心の目を開き想像力を働かせなければ、見えないままになってしまうのです。春、愛隣を巣立つ子どもたち、大人たちには、これからも「大切なもの」を見ないまま歩くことがないように、心の目がいつも開かれていますように、と祈っています。